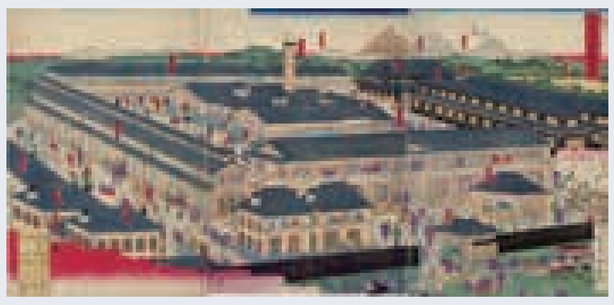
渋沢栄一と深川 1

実業界に身を投じるまで

渋沢栄一は、天保11年（1840）2月13日、武蔵国榛沢郡血洗島村（現・埼玉県深谷市血洗島）に生まれました。父の市郎右衛門は、家業の麦作や養蚕のほかに、藍玉の製造販売によって資産を築き、名字帯刀を許され、名主見習いを勤めました。

栄一は13歳頃から家業を手伝いはじめて熱心に勤め、商売の感覚を磨いていきました。一方で、学問の師匠である尾高惇忠などの影響から尊王攘夷思想に共鳴し、江戸に出てさまざまな人と交流を持つようになります。文久3年（1863）、攘夷実行のため、高崎城の襲撃と横浜の外国人居留地の焼き打ちを計画しましたが、同志からの説得などもあり、結局中止しました。この嫌疑から逃れるために、栄一は従兄の渋沢喜作とともに京都へ出奔し、一橋慶喜に仕えると、家臣として精勤しました。慶応2年（1866）、慶喜の15代将軍就任に伴い、幕臣になると、同3年（1867）、慶喜の弟徳川昭武に従い、パリ万博使節団の一員としてフランスへ渡航することになりました。翌年の帰国までの間、欧州諸国の先進技術、社会・経済の制度などに触れたことは、後の栄一の活動に影響を与えました。帰国後は、幕府崩壊にともない慶喜が謹慎していた静岡を訪れ、欧州で学んだ合本組織に基づく「商法会所」を設立しました。これは銀行と商社をあわせたような組織で、栄一が中心的な役割を果たしました。

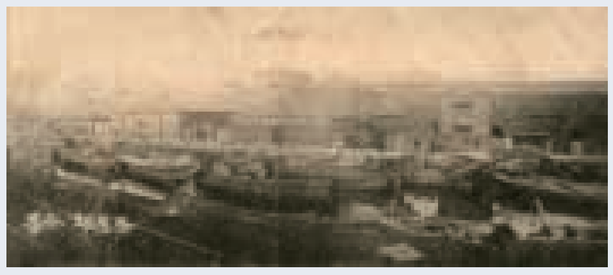
明治2年（1869）、明治政府から出仕を命じられた栄一は、民部省・大蔵省に勤務し、度量衡、租税制度、銀行制度など、日本の近代化に必要な制度の導入を手掛けました。しかし、財政をめぐる意見の対立や、実業界における人材不足などを痛感した栄一は、同6年（1873）に大蔵省を退官し、以後、実業界での仕事や社会・公共事業に邁進していくことになります。栄一は、同年日本橋に創設された第一国立銀行の総監役（同8年に頭取）に就任し、以後多くの会社の設立や育成に関わりました。



一曜斎国輝「上州富岡製糸場」
（国立国会図書館デジタルコレクション）

第一国立銀行（『第一銀行五十年小史』）
（国立国会図書館デジタルコレクション）

『新撰東京名所図会』（個人蔵）



絵葉書「大日本人造肥料株式会社」（部分）
（江東区教育委員会所蔵）
※東京人造肥料会社より社名変更

渋沢栄一と飛行家アート・スミス
（江東区教育委員会所蔵）

江東区ゆかりの人

渋沢栄一

渋沢栄一と深川 2

栄一、深川に住む

明治9年（1876）、栄一は深川福住町にあった米問屋・近江屋喜左衛門の屋敷地（現・永代2-37）を購入し、そこへ転居しました。栄一の購入した屋敷地は、大島川に面した立地で、敷地内には多数の蔵がありました。

深川は江戸時代の開発によって生まれた土地です。そこには多くの水路や堀割が設けられたため物資の運搬や荷揚げに便利で、武家の蔵屋敷のほか、商人の蔵や木場・干鰯場などが設けられ、物流や物資の集積地として栄えていました。また、深川は商業の中心地である日本橋に近いため、栄一にとっては便利な場所でした。

栄一は近代産業を盛んにするための重要な業種のひとつとして、銀行が貸付の際に担保としてとった品物の保管業務を行うために、信頼の置ける倉庫業の必要性を感じていました。明治15年（1882）、栄一らの出願によって深川に設立された倉庫会社は4年余りで解散しましたが、同30年（1897）に深川福住町の住宅内に設立された澁澤倉庫部は事業に成功しました（現・澁澤倉庫株式会社）。

『新撰東京名所図会』（個人蔵）

栄一と深川との関係

明治21年（1888）、栄一は日本橋区兜町へ転居しますが、深川との縁が切れたわけではありません。翌年には深川区会議員に当選し、区会議長に就任しました。同37年（1904）に区会議員および議長を辞任した際には、区会から感謝状を贈られています。また、深川区教育会会長への就任など、深川区の教育にも関与していました。

深川区会議長　渋澤栄一
〔『深川区史』上巻より〕

栄一は外国の要人を接待する場所として飛鳥山邸（現・北区西ケ原2）をよく使いましたが、深川に招いたこともあり、時には洲崎養魚場で魚釣をすることもありました。水郷の趣をもつ深川は、江戸時代には豪商の別荘や大名の庭園が設けられていた場所で、栄一も相手に応じて接待の場所を変えていたのかもしれません。

霊巌寺（白河1-3-32）に墓がある松平定信ともゆかりがあります。松平定信（号・楽翁）は江戸時代に寛政の改革を主導した老中です。寛政3年（1791）、定信によって導入された七分積金の制度によって蓄えられた資金が、明治時代に東京養育院の資金源となったため、定信に対して大変恩義を感じていました。東京養育院は、東京市内の生活困窮者などを保護する目的で明治5年（1872）に創設された公的施設で、栄一は同9年から事務長、同12年から亡くなるまで院長を務めました。また、政治に取り組む姿勢なども含め、栄一は定信を大変尊敬しており、その遺徳の顕彰に努めました。大正14年（1925）から定信の伝記編纂に取り組みましたが、栄一の存命中には完成せず、昭和12年（1937）に未定稿として『楽翁公伝』が刊行されました。

『新撰東京名所図会』（個人蔵）

兜町へ転居した後も、深川福住町の住宅に栄一の表札は出してあったと孫の敬三は『澁澤倉庫六十年史』に記しています。栄一は晩年まで本籍地を深川区福住町としており、深川に対して特別な思いがあったのかもしれません。

旧渋沢家住宅の変遷 1

深川の渋沢家住宅

旧渋沢家住宅は、明治から昭和にかけて渋沢栄一とその家族が暮らした住宅です。明治9年（1876）4月、栄一は深川福住町（現・永代2-37）に土地と家作を購入し、同年8月に転居しました。同10年（1877）10月、栄一は住宅の改修を行い、その設計施工を清水組二代目の清水喜助に依頼しました。喜助は既存の建物とは別に木造2階建の建物である「表座敷」を新築し、同11年（1878）11月に落成しました。

栄一が深川にはじめて建てた「表座敷」は、良材や銘木が随所に用いられており、天井には桐や神代杉の一枚板が使われています。また、釘などの金物を使わずに木を組み合わせる伝統的工法によって仕上げられています。一方、階段は親柱と手摺子には黒柿、笠木には紅紫檀、段板には欅の銘木が用いられ、洋風の意匠でつくられています。このように「表座敷」には和風と洋風の意匠が混在しており、伝統的木構造の技術と洋風の要素との融合が建物の特徴となっています。

明治21年（1888）12月6日、栄一は日本橋区兜町（現・中央区日本橋兜町）に転居し、深川福住町の住宅は、長男篤二と孫の敬三の住まいとなりました。その後、明治24～33年（1891～1900）頃には増改築が行われ、「表座敷」の東に隣接して2階建の離れが建てられました。

「表座敷」階段（清水建設株式会社所蔵）

「表座敷」2階 客間
天井は、神代杉の一枚板で、畳の縁にあわせて配置している
（清水建設株式会社所蔵）

深川から三田へ

当時の深川は、水害にたびたび見舞われたことなどから、渋沢家では深川からの住居移転を考え始めました。そして、明治38年（1905）、芝区三田綱町（現・港区三田2）の敷地を購入し、同41年（1908）、深川福住町から建物を移築しました。移築に際しては大規模な増改築が行われたようですが、「表座敷」はほぼ形を変えずに残されました。

明治以降、住宅建築においては洋風化から和洋折衷の建築様式が大きな流れとなりました。三田綱町の住宅も昭和4～5年（1929～30）にかけて、敬三によって大改造が行われました。「表座敷」を除き、和館の大半は解体され、客間・書斎・食堂などを備えた洋館が増築されました。

旧渋沢家住宅の変遷 2

国有化、そして再び江東区へ

終戦直後、大蔵大臣に就任した敬三は、財産税を導入すると、昭和21年（1946）に自らもその支払いとして三田綱町の住宅を国に物納しました。以後、建物は、大蔵大臣公邸、三田共用会議所など国の施設として使用されました。

そのような中、以前渋沢家の執事を務めていた杉本行雄（すぎもとゆきお）は、建物の払い下げを願い出ていました。杉本は、敬三の指示によって渋沢農場のあった青森県に移住していましたが、「現状のまま保存」を条件として建物が払い下げられると、平成3年（1991）に青森県六戸町（ろくのへまち）の自身が経営する古牧（こまき）温泉敷地内へ移築しました。その後、平成30年（2018）、建物は清水建設株式会社の所有となりました。今後、江東区潮見（しおみ）に移築される予定です。

青森県六戸町時代の旧渋沢家住宅　右端が「表座敷」
（清水建設株式会社所蔵）

このように、旧渋沢家住宅は何度かの移築と増改築を経ながらも、その中心には明治11年（1878）に建てられた「表座敷」がありました。その建物は、当初の形態や工法などがよく保存され、築後140年余を経ても当時の姿をよく留めています。その「表座敷」とともに構成される住宅は、和風と洋風とを巧みに調和させた設計と施工技術、および意匠・用材の優秀さを備え、昭和初期の近代住宅の姿を今日に伝えています。

渋沢栄一 略年譜 1

和暦	西暦	年齢	月	内　　容	
天保11	1840	0歳	2	13日、武蔵国榛沢郡血洗島村（現・埼玉県深谷市血洗島）に生まれる。 渋沢家は代々の農家で、畑作、養蚕、藍玉製造販売などを行っていた。	
弘化4	1847	7歳		従兄の尾高惇忠から『論語』をはじめ四書五経などの漢籍を学ぶ。	
嘉永4	1851	11歳	3	従兄の渋沢新三郎に入門し、神道無念流の剣術を学ぶ。	
				家業の畑作、養蚕、藍葉の買入、藍玉製造販売に精励する。	
安政5	1858	18歳	12	尾高惇忠の妹千代と結婚する。	
文久元	1861	21歳		江戸に出て、海保漁村塾および千葉栄次郎道場で学ぶ。	
文久3	1863	23歳	10	高崎城襲撃および横浜外国人居留地焼打ちの計画を中止。	
			11	嫌疑を逃れるため、従兄の渋沢喜作とともに京都へ出奔。	
元治元	1864	24歳	2	一橋慶喜に仕える。	
慶応2	1866	26歳	12	14代将軍家茂の死去に伴い、一橋慶喜が将軍に就任。栄一は幕臣となる。	
慶応3	1867	27歳	1	徳川昭武（慶喜の弟）に従い、パリ万博使節団の一員としてフランスへ渡る。	
明治元	1868	28歳	11	昭武の水戸家相続に伴い、帰国する。	
			12	静岡で徳川慶喜に拝謁。	
明治2	1869	29歳	1	静岡藩に商法会所を設立。頭取となり、実質的に事業を取り仕切る。	
			11	明治政府に出仕。	
明治3	1870	30歳	10	官営富岡製糸場設置主任となる。	
明治6	1873	33歳	5	大蔵省を退官。	
			6	第一国立銀行（同29年に第一銀行。現･みずほ銀行）開業。栄一は総監役に就任。	
明治8	1875	35歳	8	第一国立銀行頭取に就任。	
明治9	1876	36歳	5	養育院事務長に就任（同12年、院長に改称し、終生務める）。	
			8	26日、深川福住町（現・永代2-37）へ転居する。	深川在住
明治11	1878	38歳	11	深川福住町に「表座敷」が落成。	旧渋沢家住宅 深川福住町時代
明治15	1882	42歳	7	14日、妻の千代が死去。	
				28日、深川に倉庫会社を設立（同19年、解散）。	
明治16	1883	43歳	1	伊藤兼子と再婚。	
明治17	1884	44歳	7	浅野総一郎との出資により、匿名組合浅野工場を発足（現・太平洋セメント株式会社）。	

渋沢栄一 略年譜 2

和暦	西暦	年齢	月	内　　容	
明治19	1886	46歳	4	深川福住町の住宅に寄寓する書生らを集め、竜門社を組織し、『竜門雑誌』を発行する。	深川在住 / 旧渋沢家住宅 深川福住町時代
明治20	1887	47歳	2	高峰譲吉に協力して、東京人造肥料会社を設立（現・日産化学株式会社）。	
明治21	1888	48歳	12	6日、日本橋区兜町（現・中央区日本橋兜町）へ転居する。 以後、深川福住町の住宅は長男篤二（とくじ）の住まいとなる。	
明治22	1889	49歳	11	深川区会議員に当選し、区会議長を務める。	
明治23	1890	50歳	9	貴族院議員に任ぜられる（同24年に辞任）。	
明治24	1891	51歳		深川区の学務委員に選出される。	
明治30	1897	57歳	3	澁澤倉庫部を設立（現・澁澤倉庫株式会社）。	
明治33	1900	60歳	5	男爵を授けられる。	
明治34	1901	61歳	5	飛鳥山の住宅を本邸とする。	
				『徳川慶喜公伝』編纂の事務所を深川福住町の住宅に置く。	
明治35	1902	62歳	5	兼子夫人同伴で欧米を視察。セオドア・ルーズベルト大統領と会見。9月、帰国。	
			12	深川区教育会の会長に就任する。	
明治37	1904	64歳	10	深川区会議員および区会議長の職を辞し、区会より感謝状を贈られる。	
明治41	1908	68歳	9	深川福住町の住宅を芝区三田綱町（つなまち）（現・港区三田2）へ移築。	
明治42	1909	69歳	6	多くの企業および諸団体の役職を辞任。	
			8	渡米実業団団長として渡米。12月、帰国。	
大正4	1915	75歳	10	パナマ太平洋万国大博覧会視察を兼ねて渡米。ウィルソン大統領と会見。翌年1月、帰国。	
大正5	1916	76歳	7	第一銀行頭取を辞任し、実業界から引退。	
大正7	1918	78歳	1	『徳川慶喜公伝』刊行。	
大正9	1920	80歳	9	子爵を授けられる。	
大正10	1921	81歳	10	ワシントン軍縮会議視察のため渡米。ハーディング大統領と会見。翌年1月、帰国。	
大正12	1923	83歳	9	帝都復興審議会委員に就任する。	
昭和4	1929	89歳	5	楽翁公遺徳顕彰会が設立され、会長に就任する。	
			6	深川区霊巌寺において楽翁公百年忌墓前祭が行われ、挨拶を行う。	
昭和6	1931	91歳	6	清澄庭園大正記念館で開催された楽翁公記念講演会に出席する。	
			11	11日、死去。	

※年齢は満年齢